

R u h e (静かな憩)

ウィルウェーバー・エン

ドイツ語に接していると、日本の生活に比べてドイツでは耳に許える生活や文化が多いことに気がつく。それはドイツ語を日本語に直す時に著しい。独和、和独何れのほん訳においても、各国語の意味合いには互いにずれがあるから、全くそれに相当する訳語が見つかりにくいのは無理もないことではあるが、そのずれの度合いに大小があるので考えねばならないことがよくある。このような言葉の一つ、Ruhe についてドイツと日本の民族性を考えてみたい。

Ruhe はドイツ人の生活にはパンの如く重要なもので、日本人には理解し難い程必要欠くことのできないものである。ドイツ人が日本へ来て驚くことは、人間の多いことと同時に、雑音や騒音の多さである。それらの大小ではない。それは都会に限られるものではなく、都心を離れて、静けさや、岩にしみ入る声の蟬がいる処においても同じことである。何故ならば、そこにも日本人がいるからである。どこへ行ってもドイツ人の言う Ruhe を安心して経験することはない。Ruhe を辞書で調べると、休息、休養、静けさ、沈黙、平穩、平和、落ちつき、余暇、隠退、睡眠、永遠、等約11種類に説明されている。何れにしてもこれらの多種類の訳の出る根拠は何であろうか。これをドイツの気候風土の点から考えてみたい。

ドイツには高山がない。平野となだらかな丘のような山と森のくり返しである。この森や山をさまようとき、日本のそれらとは異なった静けさを経験して、はたと胸を打たれる。ここにこそ思索が生まれ、グリムの童話が育ち、ニーベルンゲンの伝説が伝わり、Hexe (魔女)の迷いが拡がる。人々は森林を誠に大切にす。そこに生育する樹木ばかりでなく、そこをすみかとする動物達を保護する。Förster (森林管理職)の制度が中世紀の頃より既に培われ始めた。時代の進むにつれて徒弟制度によるあらゆる職業のシステムが作られ、Förster もその一つとしてのびてゆく。Lehrling, Geselle, Meister の等級を設けて、この中 Geselle と Meister には国家試験を課し、免状を授与する。免状なしでは、Gärtner (庭師), Förster (森林管理職), Schlachter (肉、ソーセージ屋), Bäcker (パン、ケーキ屋), Schneider (仕立屋), Schuster (靴屋), Zimmermann (大工), Tischler (指物師), Koch (調理師), Goldschmied (金銀細工師), Friseur (理髪師), Drucker (印刷屋), Müller (粉屋)等の経営もできないし、そこに雇っても貰えない。Meister の免状なしでは、Lehrling を引受けてその養成をすることができない。Meister は Lehrling が幾年かの養成期間の後、国家試験にパスできるように指導する義務と責任がある。この制度は今日もドイツのあらゆる職場に生きている。in die Lehre gehen (弟子入りする)という言葉が、大都会の近代的な会社であたり前のように口にされる時、その伝統の重さと共に、これを守り、そこに誇りをさえ持つドイツの国民性を長髪の青少年の中に感じる。勿論同時に、封建的な色の濃い Lehre に対する反撥も持っている。例えば、自分達は床の掃除や、走り使いの為の Lehre に来ているのではない、仕事を覚えるためである

Ruhe (静かな憩)

と主張して、小僧修業に当然附随していた雑用を拒否する声をよく耳にする。然しこれは *Lehre* を否定しているのではない。

Förster の免状を得た管理者が森林を見て回るのは東西ドイツ全土に亘って変りがない。北海道以北の緯度に位置するドイツには、茸や木茸の類が多い。森に入って茸をとるのは自由であるが、*Förster* に出遇った時に、茸を根ごと取っているのを見つけられると罰金をとられる。茸は根元をナイフで切りとって菌糸を根と共にそっとしておくようにと子供は親から教えられて育つ。毒茸の区別も *Förster* は教えてくれる。森の腐蝕土を持ち出しても罰せられる。樹木の下枝の伐採、害虫の駆除、植林、鳥獣の保護、その他多方面の知識を持ち、動植物の学名も知っている。森林を相手の *Förster* の生活は、きびしい自然との対決であり、山男にも通じる自然人の気概を持ち、ロマンチックでもある。自から *Förster* として生きた森の詩人、*Hermann Löns*、の甘くて、純で、素直で、ユーモアで、美しい数々の詩に自から作曲した歌集、*Der kleine Rosengarten* はあまりにも有名である。古来ドイツの文学や民謡にも *Förster* はよく登場してロマンスを撒く。*Förster* のお蔭で森はよく管理される。幾百年来積りに積った落葉の上を歩くとき、弾力のこもった、厚みのある柔かさは、最高のカーペットも及ばない感触である。一年の四分の三は冷えびえとした気候であり、霧の立ちこめることが多く、冷雨が降りそそぎ通りすぎてゆき、やがては雪にとじこめられる。森は夏のさ中でも静まりかえり、黙りこくって、いつもしっとりとしめっている。いくらぬれていても、夏でも温度が低いので下草の生長はゆるやかでよわよわしい。春から夏にかけて、という言葉は日本のように長いものではなく、何となくあわただしい。人々は爆発的に、花と青葉とで一斉に始まる五月の春に、喜びも爆発させ、*Ostern* (復活祭) や *Pfingsten* (五旬祭) に酔い、さて *Tra ri ra! Der Sommer, der ist da. Wir wollen in den Garten und wollen des Sommers warten!* (う、う、う、夏だよ、お庭へ出て夏を迎えようよ) と歌う。そして早くも、寒くならない中に日やけして泳いでおこうと心急ぐ。それは年によると雨が多くてうすら寒く、夏になり切らずに終ることがあるからである。五月から八月初旬までのこの季節は日本人から見れば全体を通して春であって、夏もあるとは言えない。何故ならば花は咲きつづけ、咲き乱れ、日本の高山の花のように色鮮やかに、香り高く、鳥は歌い通す。酷暑等という無情な言葉は思いもよらない。朝晩はひやりとして、セーターをしまいこんでおくわけにはゆかない。この気候は人々を散歩好きにする。町の中でさえはや足で歩いても汗ばむことも少なく、疲れることもない。まして森の散歩は全く快適である。そこには *Ruhe* がある。森が人々に *Ruhe* を教えたのであろうか。ドイツ人が夏と称する七月から八月初旬へかけての日中の日ざしは鋭い。それは日本の高山で受ける日焼けし易い澄んだ光である。然しこの焼くような日ざしを含む空気はあくまで冷やかである。

八月のお盆前、突如としてつるべ落しの夕日と共に秋の気配がしのびよる。研究室の実験圃場の仕事はもはや日本でするように、夕暮遅くまでねばることはできない。真暗になるから急いで仕事を切りあげて、暖かい部屋で夕食の黒パンを家族とかこむことや、食後のだんらんを想いつつ家路を急ぐ。ドイツの春と秋は日本のそれらとは反対で、春はカラリと晴れていて、花曇りや春雨のムードはなく、その代わりに秋はどんよりと曇ってしめっぽい。霧が多くなる。*Der Wald steht schwarz und schweiget und auf den Wiesen steigt der weisse Nebel wunderbar.* (森は黒々と黙し、草原には白い霧が立ちのぼり、それは素晴らしい) と民謡に歌われ、シューバルトの歌曲に出て来る魔王が川辺のしだれ柳

Ruhe (静かな憩)

の下に灰色に立つ、父親が「あれは霧のたなびきだよ」という。秋は短かく、間もなく冬の木枯しが吹きよって、両者の間の葛藤が暴雨や一時の晴間となって黄葉、紅葉の錦を飾る。秋から冬にかけての霧はドイツの風物に欠かせないものの一つである。このようにして、一家だんらんと共に冬の夜長が始まる。それは翌年の三月いっぱい続くのである。Der April, der April, der weiss nicht, was er will! (四月よ四月よ、お前はとうしようというのだ)と誰もが口にする気まぐれなまだまだ寒い四月の雪どけが春のプロローグである。Winter, Winter räumt das Feld! (冬さん、冬さん、原っぱを明け渡してよ)と子供達は押しよせる春の気配と尚も争う冬をたしなめて、カッコーの歌を歌う。Winter ade! Scheiden tut weh! Aber dein Scheiden macht, dass mir mein Herze lacht! (冬さん、さよなら、お別れは悲しいものだけど、お前のきよならには私の心はニコニコしてるよ)と冬の往くのを促している。こうした九ヶ月に及ぶ長い冬ごもりにも人々は Ruhe を見出す。室内楽が育ち、文学作品の読み直し、思索、哲学、読書、手芸、工作、等は何れも冬の夜長と Ruhe に結びつく文化である。

大部分が温帯、亜熱帯の気候である日本では、師走から小寒、大寒の真冬でも、太陽が輝やき、小春日和、日だまり、等の懐かしい言葉がある。夕暮になっても、寒風に背を丸くして家路を急ぐことは少なく、帽子無しでは頭の芯が冷えて危険であるというような極寒もなく、途中でパチンコや串カツに寄り途をする。太陽の光は人々を戸外へ誘う。然しそこには Ruhe は見出されない。まばゆいまでの明るさ、開放感と同時に、地面は空気中の湿度とは無関係に乾き、植物はひからびた緑となり、害虫ははびこり、総てが埃っぽくなる。ドイツでは数日みがかないでもきれいな靴を、日本では毎日拭かねばならない。この埃を人々は呼吸し、衣服にもうけとめているのである。こうした環境は何一つ落ちつきを与えることがなく、人々を考えるよりも行動へと追いたてる。Ruhe の無いところでは、耳に許えることよりも、一見して早くつかみとる必要がある。その為に総てが表面的な考え方や見方に終っても致し方のないことである。

これに加えて気候風土より来る食生活も影響がある。日本の米食中心の食生活は、高温、多湿の条件も加わって、脂肪や油気の少ない食物を好む。安上りでおいしい米食を大量に摂ることにより満腹感を得る。然しこれは長年の間に胃拡張をおこし易い。私がドイツから帰ると、始め一ヶ月程は丼物一杯を食べかねる。然し間もなく胃は順応してふくれる。子供の下腹部がふくれているのは、日本では健康であるとされるが、ドイツでは Kartoffelbauch (ジャガイモバラ)と呼んで不健康のしるしとされる。貧しくてパンの買えぬ人が安いジャガイモを子供に多く与えたことから来る。米食で満腹感を得ると、その量の為に体がだるくなり、睡気をもよおす。思考や哲学する前に居眠りたくなる。日本の乗物の中で眠る人の多いのは、日本人が目民族で、「目は口程に物を言う」ので他人と視線を合わさないために目をとじるという説がある。然し私はそうとは思わない。日本人の目はそれ程表現に使われていない。無表情に近いとさえ言える。これは日常生活で毎日のように経験するところであって、レスポンス(応答、反応)が無いのである。日本の封建的習慣からぬけ出していないとも言えるが、又高温多湿の気候と、米食による消化器の量的過重によるけだるさが、習慣にこのような方向づけとして働いたのではないか。視線を他人と合わせないようにするのはドイツにおいても、話し相手以外の者に対しては同じことで、目のやり場はもっときびしい。他の人の腰から下へ目をやっちはいけないのは社交のマナーである。視線を合わさないまでも、じっと見られた時は何かを注意してくれて

Ruhe (静かな憩)

いるのであって、見られた者はその非がどこにあるかと自分を見回す。このような反応は日本では見られない。然しながら思考力を減退させる気候と食生活との下で、先進諸国に遅れをとらぬためには、目を使って手早く事を運ばねばならない。それに伴っておこる雑音や騒音は、けだるさと、太陽の輝やきの中では物の数ではなく、むしろ適度の刺激とさえなっているようである。駅をはじめ公共の場の多すぎるアナウンス、宣伝カーの自由放題の発声、靴をはじめその他のはき物をひきずる音、子供のつっかけに笛をつけて、それは一步毎にピッピッと鳴って親もそれで良いと思っている。あいそ笑い、話し乍らシーと齒の間から息を吸うあいの手、咳払い、鼻すすり、くしゃみ、しゃっくり、カーッと痰を吐く、げっぷ、汁物や飲物を吸るばかりでなく、御飯やおかずもすっと吸い込みながら口に入れる、口をあけてニャムニャムと囁む、お茶等を注ぐ音、自転車や自動車をギヤーといわせてストップする。日常生活は、ドイツでは聞かれぬ雑音で限りなく満たされている。騒音公害もさることながら、自己の作る騒音には無頓着である。やがては子供もそれを見做って大人になる。人里離れた山寺に静けさを楽しむ人でも、はき物をひきずり、咳払い、鼻すすりはするだろう。お寺の和尚様はしぶ茶をすすり、おしんこをカリカリかじることだろう。

教室で子供達がさわがしい時に、Ruhe!と先生は注意する。病院の廊下には Ruhe とはり紙がしてある。そして Ruhe は自分にとって必要であるように、他人にも必要であることが、子供達にしつけられる。ドイツの小中学校の授業は午前中だけで、生徒は午後一時の昼食に我が家へ帰る。食後から四時頃まで、子供にはたっぷり出された宿題を、大人は休息を、と子供達は絶対に Ruhe を守らせられる。「ペーター君の一日」というような絵本には、必らず午後の Ruhe の絵、子供達がママやお隣のオーマ(おばあちゃん)のことを思って静かに勉強している一と駒が入っている。日本では大学の教室でも学生が授業中にしゃべる。回りの人々に迷惑だと考えるしつけがないので注意をしても通じない。知っていることと、しつけられていることとは別である。日本人が「わび」や「さび」を好んでも、それは Ruhe のような絶対的なものを望んではない。様々の雑音を伴ない、それによって人間の存在を、更には生き物の存在を確かめている。ドイツの森のような Ruhe の中へ日本人をおけば、どうしようもなくとまどうことだろう。恰かもドイツ人が日本の雑音や騒音の中にほうりこまれたように。

日本の文化には目に許えるものが多い。日本画、能、歌舞伎、着物、生花、茶の湯、書道、料理、日本問、等々。又目新しい、目先の変わった、見た目にも美しく、等と目に許える言葉が多い。これに比べて耳に許える文化はスケールが小さく、特異性の強いものが多い。例えば日本音楽は歌も楽器も、世界に素直に受け入れられるには特異な点多すぎる。文学や哲学も結論を急ぐ傾向があったり、範囲が限定されてスケールが小さい。

日本に落ちつきを与えない環境として今一つ四季がある。暖かい季節が多い許りでなく、三ヶ月毎に四季が規則正しく回って来る。これは家庭を持つ主婦に最も身近かにひびく。家族の者の衣類の出し入れ、寝具や家具のとりかえや手入れ、食事のこん立て、と衣食住に亘って年中追い回される。ドイツで暮すのとは非常な差がある。日本中が四季に追われて落ちつく暇がない。冬は寒いけれども凍死の危険は少ない。従って暖房が不完全で寒さをがまんする。恰かもヨーロッパにおけるイタリーに事情が似ている。夏は耐え難く蒸し暑い。子供はあせもに苦しみ眠れぬ夜がつづく。もうがまんできないと思う頃に、ふと朝晩ヒヤリとした立秋が伝えられる。生かさず殺さずの線をゆく気候とでも言いたい。

Ruhe (静かな憩)

このような四季の移り変りに人々は一生を追い立てられているようである。これは然し落ちつきを与えない代りに骨身惜しまぬことを教えたようである。聖なる讚美歌に護られて昇天するよりも、冥土の路を三途の川やえんま大王、地獄、極楽、西方浄土へと、もまれてゆく努力を死後の魂にも与えられているようである。衣食住、宗教、芸術、教育、何れをとりあげても、和式、洋式、中国式の二重、三重の生活をしている。このように複雑多岐に亘る生活はドイツ人にはできない。とてもこれでは Ruhe が持てないであろうという。

ドイツの食生活より得られる Ruhe は大きい。そこには夕食時の忙しさが無い。煮炊きをしてないのである。これは家庭生活をはじめ国中の夕食時に大きい影響を与えている。朝は白いフランスパン様の、餅に似た風味のブレチヘンにバターとジャムやマーマレードをつけ、コーヒーや紅茶をのむ。昼食はジャガイモの塩ゆでを主食に、火を使ったドイツ料理で、めん類や米食は主食に時々変化を与える為に使う。勤め先や学校では給食になっている。そしてこれは内容豊かでぜいたくなものであるが、ドイツ人はそれでも文句を言う。その時私は罰が当たりそうに思う。「如何なる時でも不平は言うものだ、それによって進歩がある」と彼等は言う。夕食は黒パンにソーセージ、チーズ、ピクルスである。親代々十年一日の如く、每晚同じこん立てであるが、夕暮ともなれば黒パンを思い食慾がかき立てられる。夕食の黒パンは実においしい。それらはパンにも、ソーセージにも、チーズにも種類が多く飽きることがないからであろう。黒パンのある限りドイツ民族は強いといわれる。確かにそれは玄米食に相当するもので理想的な主食である。一日を終り休息に入る前の食事を黒パンにしたことは、生理的にも精神的にも Ruhe につながるであろう。寝る前に大食をすると健康に良くないと誰もが言う。私は黒パン二枚で満足してしまう。夕食は七時から八時頃なので、五時頃にはお茶の時間がある。コーヒー一杯ですませる人、ケーキを食べる人、リンゴをかじる人、クネッケブロートにたっぷりバターをつけてチーズを山と盛ったのを片手にウムウムとおいしそうに仕事する研究員等、家庭や職場によって様々である。訪問者や友人と話してこんでしまつて夕食時になつても主婦はあわてない。家族の者が帰宅して揃うと、冷蔵庫からソーセージやチーズを出して黒パンと共に食卓に並べるだけでよい。飲物に紅茶やペパミンツティ(ハッカ葉茶)を作らないで、ビールやワインをのめば、火を使うことが無い。突然訪ねても、訪ねられても、泊めて貰つても双方共に気兼ねがない。今日のおかずはと頭をしぼることもない。日本でも家事労働の軽減の策として共同炊事が提唱されるが、ドイツでは正にこれが実行されていると言えるのではないか。朝食、夕食共に既製品を買い整えるだけである。昼食には給食が時代と共に増す一方である。週5日勤務制であるから、土曜や日曜の朝食には卵を使い、昼食は主婦の腕を振る場である。午後のお茶の時間は手作りのケーキを楽しみ家庭生活は守られてゆく。互いに訪問して社交が培かわれる。夕食の心配がないから、気持ち Ruhe がある。寒い時季の長い気候の下に一家だんらんの機会が与えられ、このような食生活の伝統ができたのである。然しこれは便利であるからと日本へ導入しようとしても、たとえ黒パン冷食の材料が揃つても、忽ちこの形式は崩れてしまう。Ruhe がこのような食生活を生み、それによって Ruhe が更に保たれてゆくのであろう。

Ruhe の無い気候の故に日本では外部からとり入れた文化を落ちついて十分に観察、消化して身につける余裕を持つことがむずかしい。「ことあげせぬ国」といわれるように、問答無用であつて結論を急ぐ。「何故」、「如何に」と問うことをとびこえる。問わねばそこで会話は途絶え、社交は成立しない。考えることも、哲学することも無い。例えば儀

Ruhe (静かな憩)

式にそんな処が見られる。結婚式では順序正しく、特に始と終りを大切にす。そして祝辞を誰々が述べたかが重要であって、その内容は型にはまったものでよい。この中へドイツ人が入ると大変である。彼はどんな短かい言葉でも、そと書いて検討する。どんなことを如何に話したか、が批判されると思っているからである。反対に例えば欧米のメダルが日本人に伝達される式典において、主宰のドイツ人は伝達の式辞に重点をおいて、早くからその文章や内容をねりあげるのに苦心を払う。日本側はその式典の勝手の違うのを理解し兼ねるが、式後それが印象深く、内容豊かなものであったことを認めた。日本は他国の文化を貧りとり入れ、忙がしく要点を抽出し、結論を出して、仕上げて気が納まる。摘要するのである。生花は自然を三要素の「天地人」に要約したものであり、茶の湯は日本住居のあり方やマナーのエッセンスである。能は舞踊による魂の表現のシンボル化の極みであり、日本座敷は床の間に装飾の集中単一化をねらっている。着物も黒髪の下にのびるうなじの曲線をひき立てるのに、これを横断する衿の線のアクセントだけに集中している。首飾り等は使わない。帯の結び一つで胴の線に変化を与えて全体のバランスを背部でとり、同時に腰を目立たせぬようにして、スラリと見せるのに役立てている。脚を見せなくても、かくれた美しさを裾の線で匂わせる。着物の寸法は劃一で着つけによって個性を出す。型紙を使わず長方形の布のつなぎ合わせで、このような複雑な着こなしのできることにドイツ人は驚く。日本画は平面的に見えるが、これは線と色とで何物をも象徴的に捉え、その特長を抽出しているのである。これに比べると油画は結論を急ぐことなしに、色を重ね、ぬりかえ、かきかえて、問いかけ、自答してそのプロセスを楽しみ味わう。俳句や和歌は、日本人のリズム感であるスウィングの四拍子を保ちつつ、十七文字や三十一文字に詩の心が精選されている。これを独訳すると長々しくなる。それでもその訳文はあまり聞き苦しくない。然しドイツの詩を和訳すると、俳句や和歌に馴れている日本人の感覚には、くどくどしくて好感が持てない。

Ruhe について、その由って来るところを考えてゆくと、夫々の国の気候風土が如何にその民族に、従ってその文化に影響を与えているかが分る。国際化せざるを得なくなった今日、日本人が様々に批判される。然し何故そうであるかという問いかけはあまりなされない。日本人は denken (考える) をあまりしないといわれる。考えることをふみこえ、骨身惜しまぬ努力によって結論を急ぐ。そのあとで必要に応じて考えて回り途をしているのではないか。生活様式であれ、文化、芸術、教養であれ、しつけ、宗教であれ、欧米と比較することによって日本を批判することは、その由来をつきすすめてゆくとむずかしくなる。然し、日本は日本、ドイツはドイツと言いきれるまでには、それを分析し、観察して「何故」ということを理解整理してからでなければ、混乱して、回り道をして進むことになるであろう。

文 献

- 1) BENDA, Ludwig : Buch der Liedr,
- 2) BREUER, Hans et al : Der Zupfgeigenhansel
- 3) ECHTERMEYER- VON WIESE : Deutsche Gedichte 1954
- 4) KILLY, Walther : Zeichen der Zeit, Ein deutsches Lesebuch
- 5) LOERKE, Oskar et WEISS, E.R. : Deutscher Geist

Ruhe (静かな憩)

- 6) LÖNS, Hermann : Der kleine Rosengarten 1921
- 7) 相良守峯 : 大独和辞典, 1971
- 8) WILLWEBER, En : リズム, 大手前女子大学論文集, 1973